資源環境経済学特別演習Ⅱ　議事録
2014年度　第3回

報告題名(title)： 貸し農園ビジネスによる地域活性化の方策（マイファームの検証を通して）			
報告者(name)	水澤　長之	日時	7月　3日　午後3時～
所属分野(labo)	農業経営経済学	場所	第2講義室
座長	畠山　風花	議事録担当者	町田　奈々子

出席者

長谷部、木谷、米澤、米倉、高篠、伊藤、石井、水澤、スチン、宮里、山口、ナスン、ユニクロス、西田、佐々木、Bobby、Ari、Dani、渥美、伊藤、江守、小田嶋、金、藤井、町田、青木、黒岩、秀、武居、畠山、Tian

報告要旨(Abstract)

耕作放棄地の増加や農業後継者の減少に対して家庭菜園、市民農園は以前人気が高い。農地を利用したい人と農地を持て余してる人のギャップが埋まらない。農政も土地利用型農業の推進や規模拡大、担い手育成に主眼を置いてきて、小規模農家や一般市民などの支える人々の研究は少ない。そこで支える人が増えることによりこの問題を解消とまでいかなくとも緩和できる何らかの方策を、文献や先進事例のマイファームのヒアリング等で明らかにし、そのビジネスモデルが普及する条件を検証する。

質疑・応答(Q＆A)

武居：タイトルと報告の内容が異なるのでは？地域活性化について触れていない。
水澤：今回の報告はドクター論文の一部しか取り上げなかったので、今回地域活性化には触れなかった。

黒岩：自産自消と自給自足の違いは？
水澤：マイファームの社長としては、“自給自足”だと自分だけで完結してしまうので社会的な意味を込めて“自産自消”という言葉を使ったのだと思う。

畠山：マイファーム方式の理想的な姿はふくふくファームのような形なのか？
水澤：マイファームは広がりを見せている点、管理人が栽培を指導している点がいいと思ったが、特にふくふくファーム事業が今後の後継者を作る上で理想的だと思った。

長谷部：スライドにある 30ha とは利用者が使える面積なのか？その貸し出ししている地域の耕作放棄地のどれくらいを占めているのか。農協もこういったきめ細かいサービスを行う民間を見習った方がいいと思うかどうか。
水澤：30ha は利用者が使える面積である。その地域の耕作放棄地の具体的な割合は分からない。
長谷部：もし分からないならば、どれくらいインパクトがあるか分からない。
水澤：JA ひたちなかでも似たようなことをやっているところがあるが、広がりが見られない。どうしても農協は新たに農業に興味をもった市民を対象としたサービスを行っていないので、その辺は民間でしか出来ないのではないのかと思う。
長谷部：農協でもある程度規模を広げたら、次の担い手でステップアップするという準組合員にすればいいのでは？農協がやるのも、民間がやるのも変わらないので、準組合員を増やすチャンスにすればいいのではないか。
水澤：検討したい。